

国語科学習指導案

日 時 平成20年 7月 4日(金) 1校時

学 級 1年3組 男子18人, 女子21人 計39人

授業者 奥 山 由 美

1 単元名 3 心の歩み 「麦わら帽子」 (今江祥智)

2 単元について

(1) 生徒観

生徒は中学校入学以来、新しい環境での生活にも慣れ学習にも前向きに素直に取り組んでいる。自分を表現することも積極的で、短学活等での話し合いの場面でも、自分の意見や考えをしっかりと発言し活動している。授業においても、学習課題に素直に向き合い、考えを述べながら活動に取り組んでいる。これまで生徒は文学的文章の学習として、第1単元で詩「野原はうたう」、物語(小説)「にじの見える橋」の学習をしてきた。「にじの見える橋」では、物語の三要素(人物、時間、場所)をつかみ、起承転結の場面構成をとらえて作品の世界をつかむ学習をおこなった。

読書の好きな生徒が多く、登場人物の心情や情景描写から心情をつかむということにはあまり抵抗もなく読み取りをしていた。しかし、考えの根拠を求めると、漠然としていたり、挿絵が判断材料になっているという面も見られる。そこで、自分の考えを根拠をふまえて説明するために、作品の細部にこだわって読む、作品を分析しながら読むという能力を養いたい。

(2) 教材観

この題材において中心となる指導事項は、学習指導要領の「読むこと」のエ「文章の展開を確かめながら主題を考えたり、要旨をとらえたりすること」である。この物語は、幼い少女が、大切な麦わら帽子を使い、潮が満ちてくる海の中で命がけで翼を傷つけたカモメを助けたことによって、自信をつけ心が成長していくというものである。物語は時間の流れに沿ってすすみ、舟の上、小さな無人島、その後と、次々に場面が転換していく。平易な文章で書かれているが、潮が満ちマキがおぼれそうになる場面は読み手にも緊張感を与える書き方となっており、この作品の山場といえる。この作品は、物語の山場に向かって読み手が自然と引き込まれていく要素(「伏線」)が文章の細部にちりばめられているといえる。何がどのように山場に関係してくるのかという文章の仕組みや仕掛けを叙述に即して分析しながら読み取り、物語の面白さを味わわせたい。

(3) 指導観

そこで指導に当たっては、物語の山場である大きな出来事が起こる引きがねになっているものは何かという「伏線」を読み取る学習を中心に据え、物語の読み方を習得させたい。初めに、既習事項である物語の三要素(人物・時間・場所)や、起承転結などの場面構成をとらえ、物語の概要をつかませる。次に、物語の最初「起」と、最後「結」を比較し、主人公の心情の変化、変化のきっかけとなることを考えさせる。これらの学習を経た上で、中心となる学習活動として物語の「伏線」をさがし文章の仕組みや仕掛けなど、構造的に作品を読む力を習得させたい。

3 自分の思いや考えをみつめさせ、自分を変えさせていく学び方の構想

(1) 「自分をみつめさせる」場のあり方

自分の考えを持ち、対話や全体交流をとおして自分の考えを再構築していく学習を「自分をみつめる」場にとらえる。ここでは、物語の三要素や場面構成をまとめ概要をつかんだのち、作品の細部に描かれている「伏線」をさがすという学習を行う。まずは、出来事が起こる引きがねとなっているものは何かを探し、そう考える根拠を持つ。次に、その考えを確認し補うために対話形式で交流する。対話は、まだ考えをもてなかった生徒にとっては教え合いの場となり、考えがもてた生徒にとっては確かめの場となり、自分の考えをより確実にすることができると思う。対話をもとに、自分の考えが正しいのかどうかを検討させる学習活動を「自分をみつめさせる」場として設定する。観点に沿って文章を読み、自分の考えを根拠を明らかにしながら説明し、他と交流することで自分の考えをさらに深めさせていきたい。

(2) 「自分をみつめる」評価のあり方

評価の仕方としては、一連の学習のあとで、具体的な観点を与えてメタ認知的に振り返らせた。「学習を通して自分ができるようになったこと、分かったことは何か」、「今後さらに身につけたい力は何か」という観点で、自分を主語として学習記録をとらせる。どのような学習を経てどのような力が身についたのかを考えさせ、継続して取り組むことで「自分をみつめる」力を身につけさせたい。

4 単元の評価規準と指導の重点

国語に関する関心・意欲・態度	読むこと的能力	言語についての知識・理解・技能
「麦わら帽子」を観点を持って読み、作品の世界を想像しながら読み味わおうとしている。	「麦わら帽子」の大きな出来事が起こる引きがねとなっているものは何かを、文章を構造的に読み考えることができる。	作品中の登場人物の行為や、海での出来事、その様子を表している表現を理解しながら読むことができる。

5 指導計画 (3時間扱い)

- 第1次 「麦わら帽子」を読み、人物、場所、時間などの三要素をとらえ、起承転結の場面構成を考え物語の概要をまとめることができる。(1)
- 第2次 「麦わら帽子」の「起」と「結」を読み比べ、主人公の心情変化や変化のきっかけをとらえることができる。(1)
- 第3次 「麦わら帽子」の山場である、マキがおぼれそうになりながらも傷ついたカモメを助ける場面に向かって、どのような伏線が張られているかをとらえる。(本時 1/1)

6 本時について

(1) 目標

主人公マキが、命がけでカモメを助けるという出来事が起こるまでに、どのような伏線が張られているのかをとらえることができる。

(2) 指導の構想

本時の学習は、作者が物語を書く際に山場にむかって読者を引き込んでいくために意図的にちりばめている「伏線」を読むことで、物語の味わい方の一つを習得させたいと考えている。

まずは、「伏線」とは何かという説明をするために、小学校で既に学習した作品を用いて例示をする。小学校の既習の教材を用いるのは、登場人物の心情変化や作品の山場などおよそその作品の概要をつかんでいるのでイメージしやすいということ。また、小学校の教材であれば内容や表現も比較的簡単で抵抗感なく取り組めるだろうと考えたからである。ここでは、小学校5年生の教材である『わらぐつの中の神様』をとりあげ、おばあちゃんがマサエにたいして「わらぐつの中に神様がいた話」を始めるための「伏線」となっているものは何かを示す。

「麦わら帽子」の中では、主人公マキが命がけで傷ついたカモメを助ける場面が物語の山場といえる。その出来事が起こる引きがねとなったものは何かを、場面の設定、人物、出来事と、3つの観点を与えて考えさせたい。また、その伏線がなければ物語の展開はどうなっているのかということも考えながら読み進め、「伏線」の効果によって、読者は物語の世界に引き込まれていくのだという、作品の読み味わい方を習得させたい。授業の最後には、この題材で身につけた力を「自分」を主語としてまとめ、自己評価を行いたい。

(3) 具体の評価規準

観点	おおむね満足できると判断できる状況 (B)	十分に満足できると判断されるキーワード (A)	努力を要する生徒への支援の手だての例	評価の方法
国語に対する関心・意欲・態度	三つの観点到に沿って文章を読み、どのような伏線があるのか考えようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 答えの豊かさ ・ 根拠の説明 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観点の再確認 ・ 簡単な例示 	<ul style="list-style-type: none"> ・ シートへの記述内容 ・ 作業の観察
読むことのできる能力	出来事に向かって伏線がどのように張られているのか、構造的に読もうとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 細部に着目した読み取り ・ 観点にそった指摘 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対話による教え合い ・ 簡単な例示 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対話の様子 ・ 授業での発言

